



TITLE:

[書評] 王康「聞一多傳」

AUTHOR(S):

楠原, 俊代

---

CITATION:

楠原, 俊代. [書評] 王康「聞一多傳」. 中國文學報 1981, 33: 132-142

ISSUE DATE:

1981-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/177380>

RIGHT:

王康 『聞一多傳』

湖北人民出版社 一九七九年五月 本文四五〇頁

本書は、一九四七年七月、聞一多殉難一周年に出版された『聞一多的道路』（生活書店、本文一七二頁）を書き改めたものであり、その初稿は、ほぼ一九六四年にできあがってはいたものの、「情況の急變」によって、おのずと原稿に手を加えることもないままに、うち過ごされたという（後記）。それが、ようやくにして一九七九年五月、聞一多生誕八十周年を記念し、彼の生まれ故郷の湖北人民出版社から刊行されたということは、まことに喜ばしいことである。

本書は、全十八章四五〇餘頁からなる大部の著作であるが、その約三分の一、ほぼ七章までは、すでに『新文學史料』第一輯（一九七八年、人民文學出版社）から第四輯（一九七九年）にわたって分載されている。また、一九七八年十二月には、同じ著者による『聞一多頌』（湖北人民出版社、本文九九頁）が刊行されているが、これは一九五八年に出版され

た『聞一多』の修訂重版本であるという（後記）——『聞一多的道路』、『聞一多』いずれも著者名は史靖とされており、王康という名が用いられたのは、『聞一多頌』あるいは『新文學史料』第一輯所收の『聞一多傳』からである。

とまれ、一九七八年秋以來の中國文藝界の盛況にはめざましいものがあり、『聞一多傳』『聞一多頌』の刊行もまたそうしたなかでなされたものである。今、手元にある資料のなかから聞一多に關するものをあげてみるだけでも、次のとおり多くの數にのぼる。

一多犧牲前後紀實

高真口述  
閔銘整理

新文學史料第二輯 一九七九・二

《晨報詩刊》的始終

蹇先艾

新文學史料第三輯 一九七九・五

聞一多先生二三事

劉兆吉

新文學史料第四輯 一九七九・八

聞一多反對舊詩

鄭臨川

〃

再話《晨報詩鐫》

蹇先艾

新文學史料第五輯 一九七九・十一

關於《一多犧牲前後紀實》

杜昆

〃

聞一多三改《洗衣歌》

劉烜

新文學論叢 一九七九・二  
人民文學出版社

血土——回憶父親聞一多烈士

聞立鵬

革命文物 一九七九・二  
文物出版社

聞一多佚詩五首

中國現代文藝資料叢刊第四輯 一九七九・十一  
上海文藝出版社

關於聞一多的幾首佚詩的一點說明 陸耀東 "

吳晗雜文選 人民文學出版社一九七九・十二

拍案而起的聞一多(一九六〇・十二) 哭一多(一九四六・四十)

聞一多先生傳(一九四六・上) 人民日報 一多先生周年祭

聞一多先生回憶片斷 趙仲岳 社會科學戰線 一九八〇・

聞一多先生與《楚辭》 王達津 "

悲憤滿懷苦吟詩 臧克家 新文學史料 總第八期 一九八〇

聞一多論 時萌 文學評論叢刊第六輯 中國社會科學出版社 一九八〇・八

懷人集 臧克家 上海文藝出版社 一九八〇・八

我的先生聞一多(一九四六・八) 聞一多的詩(一九五六・六・六)

海——回憶一多先生(一九四七

聽爭鳴念一多先生(一九五六・七

聞一多先生的藝術創作(一九七八

聞一多先生傳略(一九五四・十二

新文學史料第五輯「資料索引」には、この他にも十編をあげている。

聞一多に關する資料は、なお多くのものがあるだろう。だが、この『聞一多傳』ほどに大部の著作は、他にない

# 書評

いつてよい。王康は、そのなかで近代中國における傑出した詩人であり、學者であり、さらには民主運動の闘士でもあった聞一多(一八九九—一九四六)の波亂にとんだ一生の軌跡を、時代を追って丁寧を描いている。

ところで、朱自清は『聞一多全集』(開明書店(一九四八年)序文のなかで、聞一多の生涯を詩人時代(一九三〇年青島大學の教授となるまで)、學者時代(一九四四年五月三日昆明西南聯合大學の五・四歴史の夕べの會に参加するまで)、闘士時代(それ以後の二年餘り)の三つに分けている。本書の敘述もほぼそれに一致する。しかし、本書においては、學者時代に六章一二〇餘頁、闘士時代に六章一八〇餘頁があてられ、詩人時代にはわずかに二章たらず、アメリカ留學中を含めても三章しかさかれていない。つまり、王康は、國共内戦のさなか國民黨特務の手によって暗殺されるに至った、民主運動の闘士としての聞一多に最も力を注いで本書を書いているのである。われわれは「聞一多頌」を書くべきである(彼は、われわれの民族の英雄的氣概をしめした)という、毛澤東の三十年前の呼びかけが本書のはじめに明記

されていることから、それは當然のことであるといえよう。本書は、何よりもまず「聞一多烈士」を理解し、認識する（後記）ために書かれているのである。

聞一多の學生であり、同郷で遠縁にもあたる王康は、まず本書第一章において、聞一多の生まれ故郷、湖北省浠水縣巴河鎮付近の風物と、當時の時代状況をまじえて、彼の幼少年時代を語る。第二、三章においては、アメリカ留學生の派遣養成を目的とする清華學校での九年間（一九一三～二二）を、『清華週刊』に掲載された文章——全集にも收録されていない——を適宜に引用しつつ、五四運動に焦點をあてて詳述している。なお、清華學校卒業が一年遅れたこととの理由については、『聞一多的道路』の記述を誤りとして訂正している（五七頁）。

第四章においては、アメリカ留學中（一九二二～二五）、シカゴ美術學院、コロラド大學美術科、ニューヨークの美術學院で學ぶかたわら、多くの新詩を書き、一九二三年九月には第一詩集『紅燭』を出版、またアメリカ在住華僑の悲惨な境遇をまのあたりにするとともに、自らも中國人蔑視

を経験し、愛國主義に傾いていったことが、第五、六章においては、歸國後（一九二五～三二）、北京藝術專科學校（教務長）、吳淞の國立政治大學、國民革命軍總政治部、南京第四中山大學（外國文學科主任）につとめながら、著名な詩論「詩的格律」（二六・五）や第二詩集『死水』（二八・二）を出版し、大きな影響を及ぼしたことが記されている。聞一多の詩人時代である。だが、『死水』出版の後、創作活動はほぼ終わりをつけ、二八年秋、武漢大學文學院長兼中文科主任となつてからは、杜甫をはじめとする唐詩の研究に力を注ぎ、「少陵先生年譜會箋」を發表、また「唐代文學年表」、「初唐大事表」等を作成したという。なお武漢・青島兩大學辭任の原因となつた政界がらみの派閥抗争の経緯についても、ここでは詳述されている（青島大學文學院長兼國文科主任となつたのは、一九三〇年秋）。

第七、八章においては、母校の國立清華大學における五年間（一九三二～三七）が記されている。聞一多は、中國文學科教授として、唐詩から詩經、楚辭、樂府、古代神話等までに至る研究に没頭、「天問釋天」、「詩新臺鴻字說」、

「高唐神女傳說之分析」等を發表した。「外へむかつて發展していく道が通れない以上、内へむかつて歩かなければならなかった」のである。

しかし一九三七年七月、蘆溝橋事件が勃發し、清華大學は湖南へ移轉、北京大學、南開大學と合同して長沙に臨時大學を組織する。聞一多もここで教えるが、まもなく南京は陥落（同年十二月）、臨時大學は昆明移轉を決定する。聞一多は、このとき二百餘名の學生の組織する徒步旅行團に参加、六十八日かかって三八年四月昆明に到着するが、この間學生とともに少數民族の服裝、言語、民謡、傳説、神話等について調査研究を行ない、また人民の苦しい生活にふれ深い同情を寄せたという（九章）。

聞一多は、以後死に至るまでの八年間をこの地で過ごすのだが、王康はここでの彼に第十章からあとのすべて——九章二五〇餘頁——をさいている。臨時大學は西南聯合大學と改稱され、聞一多は『爾雅』、『楚辭』等を講じ、また詩經、楚辭、樂府、神話等の舊稿を整理し、『樂府詩箋』、『楚辭校補』等を刊行する。やはり、「内へむかつて發展

していく道」を歩きつづけたのである。

しかし一九四三年ごろからは、『新民主主義論』、『新華日報』等を眞剣に讀むようになり、一九四四年五月三日には、「五四」二十五周年記念座談會に参加、求められて講演する。民主運動の闘士としての生活の始まりである。同年夏には正式に民主同盟に参加、以後、民主と平和を求めて多くの雜文を發表し、講演をする。子供五人をかかえた聞一多の生活は、この間ますます困難なものとなってゆき、篆刻の仕事を始め、また中學の國文教師を兼任したりもするが、國民黨の御用學者となることはなかったのである。

そしてついに國共内戦のさなか、一九四六年七月十五日、聞一多は國民黨特務によって暗殺されてしまう。同じく暗殺された李公樸の葬儀委員會の集會で講演をおこなっての歸途、狙撃されたのである。西南聯合大學解散のあと（同年五月）、カリフォルニア大學からの招聘をも斷わり、「自らが熱愛する人民と、自らが日夜待ち望んでいる新しい中國のために、自らの最後の一滴の血まで流しつくした」のであった。王康は、

「彼が、聞一多烈士が、革命のために人民のために行ない、書き、そして語ったことのすべては、いつまでもわれわれの心のなかに生きている！」

という文章をもって本書を終えている。

本書後記のなかでも、「新中國で幸福に生活している若い世代の人々」にたいし、烈士らの血の跡から長く苦しかった革命の道程を知ってもらいたいと述べているように、王康はこの本文四五〇頁の『聞一多傳』のなかで、聞一多

の生涯の軌跡とともに當時の時代情況についても詳しく語っている。本書は、あるいは「聞一多とその時代」とも題すべき大部の著作である。そして、そこには隨所に聞一多の詩、雜文、講演録等が引用されており、また各章はじめには必ず聞一多の詩の一節が引かれている。この十數年來、聞一多の全集はもとより、選集、作品集でさえ出版されていないのだが、本書によって若い世代の人々は、いくらかでも彼の詩文にふれることができるようになったのである。王康は、後記において、さらにこうも述べている。

——われわれは、四つの現代化實現のために、詩人學

者（聞一多）の刻苦勉勵の精神と實事求是の學風を學び、知識と文化の水準を向上させ、社會主義新中國をより一層繁榮させ富強なるものに建設しようではないか。

本書に記されているように、聞一多烈士の生涯——革命のために人民のために行ない、書き、そして語ったことすべて——は、十二分に感動を與えるものであり、讀めるべきものであり、また四つの現代化實現のため模範とするにふさわしいものである。

だが、私はこの王康の力作を讀み終えて、何かしら奇異な感にとらわれないではいられなかったのである。

例えば、アメリカ留學中の彼についてであるが、シカゴ美術學院在學中、彼は霍毅夫ら四人の友人への手紙のなかで、

——授業に出ている禁斷症狀が起こって、宿舍に歸れば、Byron, Shelley, Keats, Tennyson, 老杜、陸放翁が書架で、机の上で、ベッドの上で自分を待っている、  
とどうにもその心がむずむずしてきて……

としたため、またコロラド大學在學中の彼については、梁

實秋が、

——彼と共に「近代詩」および「テニスとブラウニング」の授業に出、前者においては全部で二十数名の詩人の代表作を読んだ。一多の『死水』は、技術面においてこの頃の學習に大きなお蔭を被っている。すなわちキップリングの節奏、ハーディ、ハウスマンの情趣から少なからぬ影響を受けている。私と彼はこの二つの授業にきわめて大きな興味を抱き、授業に出では講義を聞き、授業がすんでは自ら閱讀討論をおこなった。

と書いている。これらは、それぞれ『聞一多全集』年譜、一九二三年三月三十日と十月の項に收められているのであるから、王康も當然眼にしているはずのものである。聞一多の詩を語るうえで、十九世紀英國詩人の影響は無視できない。にもかかわらず本書においては、このことについて全く言及されていないのである。一體、それはなぜなのか。

また、王康は、

「彼の詩集『死水』のなかに、多くのすぐれた『十四行』體の詩篇を見ることができる。」（九七頁）

書 評

といっている。たしかに聞一多は、一九二八年の三月と四月、『新月』誌上に譯詩「ブラウニング夫人の戀愛詩」（ソネット）を發表し、「この種の形式に『商籟體』という譯名をはじめてつけ」、「『商籟』というものに、はじめて人の注意を拂わせ」ている（朱自清『新詩雜話』九七頁、港青出版社）。しかし、詩集『死水』所收の詩全二十八篇のうち、十四行（の）詩は「收回」（Shakespearean sonnet）、「你指着太陽起誓」の二篇のみであり、それも各押韻法、一行の字數が異なっている。『死水』においては、むしろ新詩の格律のさまざまな可能性をきり開いたことが強調されてしかるべきであって、そしてこのことは本書にも記されているのだが、それにしても「十四行」體の詩篇が多く見られるという王康の説には、ひっかかるものを覚えるのである。

聞一多の代表作『死水』は、彼の第二詩集であるとともに、最後の詩集でもある。「聞一多先生的書桌」は、その最後に收められた詩であるが、王康は、この詩を引用してから次のように述べている。

「聞一多が、かの反動的な暗黒の時代にあって、この

ようにユーモアをもって生活を嘲笑したのは、目的もなくわずかに自らを嘲弄するためであつたのでは斷じてなく、たしかに『秩序は私の能力の内にはなかつた』からなのであり、一切は國民黨新軍閥らの統治によって残すところなく破壊されていたのであつた。」（二三頁）

すなわち、王康は、「聞一多先生の書桌」をこのように「國民黨新軍閥」と結びつけてしかとらえていないのである。

ところが、梁實秋の『談聞一多』によれば、この詩は聞一多アメリカ留學中に書かれたものであり、『死水』所収作品中おそらくは最も早く書かれたと考えられるのである。當時、聞一多と同じくコロラド大學に在學中であつた梁實秋は、『談聞一多』のなかで次のように述べている。

「一多の部屋は、いつもめちやくちやに混亂しており、寢床は整えたこともなく、繪をかくときに羽織る上着には、油繪具の斑點の他にもさまざまなしみがついていた。人をして最もびっくりさせ訝しがらせるものは彼の机で、あるとき私がその亂雜をからかったところ、彼は、そのときは何も言わなかつたのであるが、翌日私に一篇の詩

を見せてくれた。」（四一、四二頁）

それが「聞一多先生の書桌」であつたと、梁實秋はいう。彼の記述によるならば、この詩には洒落たユーモアが感じられる。だが、このアメリカ留學中に書かれた作品が、それから四年ほどあとに出版された詩集の最後に置かれていたのである。

この間、聞一多は「絶望に満ちたどぶたまり」（死水）のごとき中國の現實を前にして、「もしもただ一杯の酒一冊の詩集／靜夜に時計の振り子が刻む安らかな一時のために／……生活の石臼の下に碾かれる各種の慘劇が見えなくなるのなら／この頭蓋骨を田鼠に穴掘らせ／この血肉の塊で蛆虫を養うのが一番だ／……私の世界はこの尺四方の壁の内にはないのだ」（靜夜）と言い放ち、中國固有の詩よりも西洋固有の詩よりも新しい詩（女神之地方色彩）を模索しつづけている。その聞一多が、尺四方の壁の内の、さらに狭苦しい己が机の上の亂雜をうたつた詩を、詩集『死水』の最後に配しているのである。そして、そのなかで「一切の衆生は各その分に安んずべし／私がどうして故



意に君たちを踏みつけにしよう／秩序は私の能力の内にはないのだ」と、語っているのである。

王康は、しかし、そうしたことには全くふれていない。

梁實秋の『談聞一多』は、一九六七年一月、臺灣の傳記文學出版社から出版されたものであるため、王康はあるいは手にとってみるものがなかったかもしれない。

だが、それにしても梁實秋と聞一多とは、清華學校、アメリカ留學時代を通じての友人であり、また同じく新月派に屬していたのである。『聞一多全集』庚集書信にも、一多の實秋宛の手紙が數多く收められている。詩人としての聞一多を語るうえで、梁實秋は、はずすことのできない人物なのである。にもかかわらず、王康『聞一多傳』のなかに、梁實秋という名は見當たらない。それは、批判・否定すべき人物としても登場させられていない。全く抹殺されてしまっているのである。(劉烜の「聞一多三改《洗衣歌》」には、聞一多の手紙が梁實秋宛のものと明記して引用されているのだが。) あるいは、そこに、梁實秋が一九四九年臺灣へ移っていったことにたいする王康の思いがこめられて

いるのかもしれない。アメリカ留學中、十九世紀英詩にふれ、そこから大きな影響を受けたということに全く言及されていなかったのも、梁實秋をぬきにしては語りえないからであつたかもしれない——先に引用した「年譜」一九三三年十月の項は、梁實秋の記述によるものであつた。

しかしながら、傳記を書く場合、その對象となる人物とたとい一時期とはいえきわめて親しかった人物を故意に抹殺してしまうことは、それが執筆時の社會情況によるものであれ著者の意圖するところによるものであれ、いずれにせよ傳記全體のどこかに無理が生じ、安易な敘述に陥ることになってしまうのではないだろうか。

そうした安易さは、つぎの箇所にも見られる。

「彼の詩境には、義山、キーツ等ばかりか、『大鼓師』、『飛毛腿』といった善良なる勞働者の形象まで出現し……」(二〇五頁)

と王康はいふ。人力車夫である「飛毛腿」も「大鼓師」も、たしかに「善良なる勞働者」ではある。だが、「大鼓師」は少し違ふように思われる。聞一多は、この詩において、

「私は豹皮の太鼓をひとつ掛け／私はそれを叩いて世界中を廻った／私はいろんな歌をうたって／私は盡きることのない喝采にも聞き飽きた（第一連……／私は英雄がうたえる 私は豪傑がうたえる／あの美しい乙女や情夫の歌も私はうたえる／だがもしも私たち自身の歌はと尋ねられたら／ああ 私は本當に口では言えないくらい慌ててしまう（第三連）／……本當に私たちにはうまくうたえる歌がないんだ 私たちは／子供でもないし また英雄でもないのだから（第十二連三、四行）」と、うたっているのである。

文學作品とその作者とを安易に結びつけて考えることは、自戒せねばならぬと十二分に承知しつつも、私にはこの詩に詠みこまれた太鼓たたきが、新しい中國の詩、子供でも英雄でもない「私たち自身の歌」を模索せんとする詩人聞一多の姿であるに他ならない、と思われるのである。「善良なる勞働者の形象」を出現させたことにのみ、この詩の意味を見出すのは、いささか安易にすぎると考えるのであるが、いかなるものであろうか。

王康のいうように、詩集『死水』に收められた詩のかな

りの部分において、聞一多は「祖國の運命と人民の苦しみにたいしより多くの關心を拂っている」ことが知られる（二二三頁）。また、『天安門』等の詩を書いて、軍閥政府青年殘殺の罪行にたいし、抗議」を行なつてもいる（二〇四頁）。王康の、こうした聞一多の詩解釋について、私は決して異議を唱えるものではない。だがしかし、前述のような疑問を抱かざるをえなかったのも、また事實である。

王康は、本書において、聞一多とその時代をきわめて丁寧に描出している。彼は、聞一多の同郷で遠縁にもあたり、そして西南聯合大學では聞一多の學生でもあった。しかしながら、あくまでも公正に客觀的に記すことを意圖したためであろうか、本書のなかに彼の姿は一度も登場しないのである。同郷で遠縁にあたることも、わずかに吳晗の「聞一多的道路」序」によって知られるだけである。彼は三人稱で語りつつ、事實のみを積み重ねていく。だが、事實のみが丁寧に語られていけばいいほど、また本書において梁實秋の名が全く出てこないということに、奇異な感を抱かないではいられないのである。一體なぜ、梁實秋の名が一

度も出てこないのであろう。胡適の方は、批判されるべき人物として語られている（六九頁、他）のだが、それは聞一多とあまり親しい間柄にはなかったためなのか。この膨大な事實の積み重ねの向こう側に、梁實秋と同じように、全くふれられていない、あえて抹消されてしまった何かがあるのではないかと、私にはそう思われてならないのである。本書三二八頁には、またこうも記されている。

「かつて長期にわたり進歩という上着をはおり、魯迅の名をかりて騙りを働いた胡風は、當時まだ完全に化けの皮がはがされてはいなかったものの、やはり十分に劣悪であった。」

當時とは、一九四四年十、十一月頃のことであり、なお魯迅と新月派との對立が尾を引いてはいたのであるが、それにしてもこの記述には、多分に政治的な評價が含まれている——胡風はすでに自由をえて、四川省で政治協商會議の委員になっているが、正式の名譽回復は目下、黨中央で検討中だという（竹内實「中國文學の波と聲」、*アジア・クォーターリ*、一九八〇・六）。また、竹内實「モスクワで北京を考える」（*中央公論*、一九八一・二）には、

胡風は目下、北京の病院の精神病科に入院中（*新晚報*一九八〇・十一・三九）、彼がすっかり平靜をとりもどすのも、そう遠いことではないだろう、と記されている。

本書もまた、中國における今日の政治情況のもとに生み出された著作であるといえる。だがしかし、それが讀者にたいし、たとえいかに奇異な感を與えようと、そこにはより多くの眞實が語られていることも、また事實なのである。

本書は、西南聯合大學の師友と民主同盟中央總本部、王健その他の同志の支持と、吳晗、費孝通、許師謙、範用、周振甫その他の師友同志の援助と指導のもとに書き上げられたものであるという（後記）。また、本書の初稿は、勤務時間外を利用して斷續的に書きためられたものであり、その殘稿は、王子光および王康の身うちの人達によって保存されていたともいう——自らについては、このことのほかに何も語らなかつた王康は、しかし、本文のなかで聞一多の弟、聞家駟が現在北京大學西方語文學科教授、全國政協（政治協商會議）常務委員、北京市政協副主席であること、

夫人はとうに古稀をすぎ現在全國政協委員、北京市政協委員であること、五人の子女は健やかに成長し、いずれも榮ある共產黨員となったこと等を注記している。本書の表紙と寫眞の頁は、聞一多の息子、聞立鵬の手になったものである。この大部の傳記は、すなわち、これら多くの人々の支持と激勵と援助のもとに、初稿が書かれて以來ほぼ十五年の後に、はじめて刊行されたものなのである。

中國において、今後もさらにひきつづき、さまざまな分野でより多くの書籍が刊行されるよう、また『聞一多全集』も再版されるよう、私は心から願っている。

(一九八一年一月二十二日)

(同志社大學 楠原俊代)